

19世紀英国における 翻訳イソップ集に関する一考察

——「蛙と牛」にみる母蛙の怒りを中心として

吉川 齊

1. はじめに

近代の日本におけるイソップ普及の礎を築いたのは、1873年（明治6年）刊行の渡部温『通俗伊蘇普物語』である。渡部本は主にほぼ同時期の英国で刊行された英文翻訳イソップ集を日本語に翻訳したものであるが、出版後すぐに小学校の修身教育の教科書として用いられるなどして、広く普及することになった¹。

渡部が翻訳の原本に用いたのは、トマス・ジェームズ James, T. (1809-1864) およびファイラー・タウンゼント Townsend, F. (1814-1900) による英文「翻訳」イソップ集である。それぞれ初版は1848年と1867年に刊行された。渡部本はとくに前者（の1863年の改訂版）を中心とするものであったが²、ほぼ同時代の英語本が日本へと移入され、日本語で独自の拡がりを見せることになった。当時の日本に何が持ち込まれたのか、という文化転移の観点からも、これら二つの英文イソップ集は興味深い対象である。

1 小堀(2001), pp. 260-266。なお、日本では近代以前に『エソポのハプラス』『伊曾保物語』といったイソップ集が存在したが、近代における普及という観点では断絶がある。ただ、『伊曾保物語』由来の話が渡部本にも含まれるため、少なくとも後者は、明治初期の日本においても完全に失われていたわけではない。

2 谷川(2001), p. 280。また、タウンゼント本については、やはり1873年(明治6年)に福沢英之介が『訓蒙話草』として抄訳を刊行している。(ただし、福沢本ではタウンゼントの名には触れられない)

ジェームズによる英文翻訳イソップ集は“Aesop’s Fables: A New Version, Chiefly from Original Sources”と題される。全 203 話、ジョン・テニエル Tenniel, J. による美麗な挿絵を多数含み、(おそらくそのこともあいまって、) わずかな間に幾度も版が重ねられるほど人気を博した。ジェームズ本は Chiefly from Original Sources を副題とするが、編者ジェームズ自身は、序文において、その翻訳方針に関して以下のように述べている³。

In the present Version, however, no strict and definite plan of translation has been followed. Though the general rule has been to give a free translation from the oldest source to which the Fable could be traced, or from its best later form in the dead languages, there will be found exceptional cases of all kinds. Some are compounded out of many ancient versions: some are a collation of ancient and modern: some are abridged, some interpolated: one takes the turn of a Greek epigram, another follows the lively and diffusive gossip of Horace: some walk more in the track of the Greek verse of Babrius, some in that of the Latin verse of Phaedrus: a few adopt the turn given by L’Estrange, or speak almost in the very words of Croxall or Dodsley.

ジェームズは、厳密な規定はおかずに自由な翻訳を行う、とする。ただ、その「自由」は、必ずしも好き勝手な改変を意味するものではない。ここで述べられるジェームズの手法は、多少の挿入や短縮は行いつつも、何らかの参照元を前提とするものといえるためである。

ジェームズが題材とする「イソップの話」Aesop’s Fables は、古代ギリシャに端を発し、時代・地域・言語を超えて、受け継がれている対象である。語り手も様々であり、ひとつの話に対して、しばしば複数の異なるバージョンが生み出されている。ジェームズの示した方針は、そのような状況をふまえて、ある話を翻訳するにあたって、その話について参照可能な複数のバージョンにもとづき、自身の話を構築しようとするものである。

とはいえ、“the oldest source to which the Fable could be traced” というとおり、ジェームズの基本的な姿勢は「古典」への回帰であり、古典ギリシャ語およびラテン語版が基礎となる。具体的には、序文で言及されるバブリオス (Babrius) およびファエドルス (Phaedrus) のイソップ集 (現存するも

3 James (1848), p. xviii.

のとしては最古の部類) がそれにあたり、あるいは両者以前のものとして、ホラティウス (Horace) などの名も挙げられる。なお、レストランジ (L' Estrange)、クロックソール (Croxall)、ドズリー (Dodsley) は、当時普及していた既存の英語版であり、19 世紀にも広く読まれていた。ともすれば、ジェームズ本の“A New Version”の表記は、おそらくこれら既存の英訳版を意識したものであった。

一方、ジェームズ本同様に 19 世紀半ばに英国で刊行されたタウンゼントの英文翻訳イソップ集は“Three Hundred Aesop's Fables: Literally Translated from the Greek”と題され、全 313 話、ハリソン・ウィアー Weir, H. の手による多数の美しい挿絵を含む。そして、タウンゼント本もまた、度々再刊された。なお、タウンゼントの序文では、古代から近世ヨーロッパにおけるイソップ集の歴史が具体的に述べられており、ジェームズよりも専門的な説明を意識しているように見える⁴。

タウンゼント本は、“Literally Translated from the Greek”を副題とするとおり、ギリシャ語原文からの(直訳的 literally)英語訳を主眼としていた。これは、以下のように、タウンゼントが既存の英訳イソップ集に批判的であったことと関係している⁵。

The two chief existing English versions of Aesop are those by Archdeacon Croxall, and by the late Rev. Thomas James, canon of Peterborough. The first of these deviates so very far from the text, that it degenerates into a parody. The fables are so padded, diluted, and altered, as to give very little idea to the reader either of the terseness or the meaning of the original. The second of these is an improvement on its predecessor, but Mr. James, either out of compliance with the wishes of the publishers, or in condescension to the taste prevalent some twenty years ago, has so freely introduced as the point of the fable conventional English sayings which are not sanctioned by the Greek, and which in many instances are scarcely equivalent to it, that his version frequently approaches a paraphrase rather than a translation.

4 Townsend (1867), *Preface*. ただし、説明の内容に関しては、事実関係に誤りも見られる。たとえば、タウンゼントは、カクストン本について、ボナス・アックルシウスが刊行したギリシャ語イソップ集の英訳と説明しており (ibid., p. xii)、彼がシュタインヘーヴェル本やマシヨ一本を把握していなかったことが窺える。カクストン本については本稿第 4 節参照。

5 Ibid., pp. xx-xxi.

タウンゼントが問題としたのは、ジェームズ本を含めた既存の英訳本が原典テキストに即したのではない、という点であり、この点がまた、タウンゼントがギリシャ語原典をもとに新たに英訳イソップ集を編纂しようという動機ともなった⁶。タウンゼントは、序文の最後で “he resolved ... to do his best towards the attainment of so desirable an object as a purer translation, and more literal rendering of fables so justly celebrated” と述べるのであり⁷、自身の翻訳に関して、半ば原理主義的な志向を見て取ることができる。

ジェームズと異なり、タウンゼントは以下のように具体的な原典リストを示している⁸。

Babrii Fabulae Aesopeae. George Cornewall Lewis. Oxford, 1846.

Babrii Fabulae Aesopeae. E codice manuscripto partem secundam edidit. George Cornewall Lewis. London: Parker, 1857.

Mythologica Aesopica. Opera et studia Isaaci Nicholai Neveleti. Frankfort, 1610.

Fabulae Aesopicae, quales ante Planudem ferebantur cura et studio Francisci de Furia. Lipsiae, 1810.

Αἰσωπείων Μυθῶν Συναγωγή. Ex recognitione Caroli Halmii. Lipsiae, 1851.

Phaedri Fabulae Aesopiae. Delphin Classics. 1822.

挙げられている文献は、古典ギリシャ語のものが中心であり、また、当時利用できる最新のもののまで参照していたことがわかる。(たとえば 1851 年刊行とされるハルム本は、その後 20 世紀半ばまで、日本においてもイソップ集の基本的な原典の一つとして用いられる性質のものであった⁹。)ただ、1610 年刊行のネヴェレ本はラテン語イソップ集も含み、最後に挙げられるファエドルス集はラテン語であるから、必ずしも原典が古典ギリシャ語だけであったというわけではない。

6 Ibid., p. xxi.

7 Ibid., p. xxiii.

8 Ibid., p. xxiii.

9 ハルム本は 1852 年の刊行であり、1851 年表記は誤りである。日本における例としては、たとえば山本 (1942) の解説では、翻訳時に利用した原典以外で参考にしたものとして、また、河野 (1955) のあとがきでは、翻訳に用いた「学問上すぐれた」テキストのひとつとしてハルム本が挙げられている。ただし、両者は刊行年の異なるものを用いている。

さて、以上のように、両者は「古典」を基調とする点は同じといえるが、「翻訳」に対する基本的姿勢では相違を示している。両者の英文イソップ集は明治初期の日本に移入されることになったが、両者の「翻訳」がそもそも如何なるものであったか、これまでほとんど顧みられていないように思われる¹⁰。本稿では、両者に共通して含まれる話のなかから、「蛙と牛」の話を題材としてとりあげ、原典も含め両者の翻訳を比較検討し、その在り方を具体的に考察したい。

2. 「蛙と牛」の話

「蛙と牛」の話は、およその筋書きとしては、蛙が牛と同じ大きさになろうと身体を膨らませる話である。古代では、ファエドルス集およびバブリオス集に含まれ（しかしギリシャ語散文イソップ集には含まれない）、また、それら以前にもホラティウスに長めの言及が見られる¹¹。

まず、ジェームズ版とタウンゼント版を確認しておこう¹²。

ジェームズ版：FABLE XXXIV

THE FROG AND THE OX

An Ox, grazing in a swampy meadow, chanced to set his foot among a parcel of young Frogs, and crushed nearly the whole brood to death. One that escaped ran off to his mother with the dreadful news; “And, O mother!” said he, “it was a beast – such a big fourfooted beast! – that did it.” “Big?” quoth the Frog, “how big? was it as big” – and she puffed herself out to a great degree – “as big as this?” “Oh!” said the little one, “a great deal bigger than that.” “Well, was it so big?” and she swelled herself out yet more. “Indeed, mother, but it was; and if you were to burst yourself, you would never reach half its size.” Provoked at such a disparagement of her powers, the old Frog made one more trial, and burst herself indeed.

So men are ruined by attempting a greatness to which they have no claim.

10 ジェームズの原文と渡部の翻訳の比較はしばしば行われている。新熊(2008), pp. 54-56 など。

11 詳しくは本稿第3節参照。

12 テキストは James (1848), pp. 35-36 および Townsend (1867), p. 49 より。ジェームズのものは初版本であるが、改訂版とテキストは同一である。なお、この話には、ジェームズ版とタウンゼント版ともに挿絵が附されている。

タウンゼント版：

THE FROG AND THE OX

AN Ox drinking at a pool, trod on a brood of young frogs, and crushed one of them to death. The mother coming up, and missing one of her sons, inquired of his brothers what had become of him. “He is dead, dear mother; for just now a very huge beast with four great feet came to the pool, and crushed him to death with his cloven heel.” The Frog, puffing herself out, inquired, “if the beast was as big as that in size.” “Cease, mother to puff yourself out,” said her son, “and do not be angry; for you would, I assure you, sooner burst than successfully imitate the hugeness of that monster.”

一頭の牛が子蛙を踏みつぶしたあと、母蛙が牛の大きさを確認するために自分の身体を膨らませる、という基本的な筋書は共通する。子蛙が、大きな四つ足の動物が兄弟を踏みつぶしたと母蛙に報告し、蛙の側からは牛が正体不明の動物である点も共通である。しかし、細部の展開には相違がいくつもみられる。特徴的な部分をまとめると以下のとおりである。

	ジェームズ版	タウンゼント版
① 牛の様子	・沼っばい草地で草を食べ ている	・水たまりで水を飲んでい る
② 踏まれた子蛙	・一匹を除いてすべて	・一匹のみ
③ 母蛙への報告	・現場に母蛙は不在 ・子蛙から母蛙へ語る ・四つ足の大きな獣	・現場に母蛙は不在 ・母蛙が子蛙に尋ねる ・四つ足の大きな獣
④ 母蛙が身体を膨らませ る場面	・計3回身体を膨らませる ・2回目に、破裂すること になっても、半分の大 きさにもならない、と子 供が答える ・母蛙は怒って、さら に身体を膨らませ、破 裂してしまう	・計1回身体を膨らませ る ・同じ大きさになる前 に破裂してしまうから 、と子蛙が止める ・発言時、子蛙は「怒 らないで」とあらかじ め母蛙を牽制 ・母蛙は破裂しない
⑤ 話後の教訓的文言	・あり（人は、身の丈 を超えた大きさに挑ん で、その身を滅ぼす）	・なし

なお、ジェームズ版の母蛙は怒って破裂にいたるが、その怒りは子蛙を踏みつぶされたことによるものではなく、子蛙による、自身の能力に対する一種の見くびりに対する怒りである。タウンゼント版の子蛙の発言も、同様の前提によるものと理解できる（牛への怒りではない）。この点については、結末は大きく異なっても共通である。

いずれも「蛙と牛」として示される話であり、基本的な筋書は共通しているながら、細部にこのような大きな相違がみられるわけである。これらが何に由来するものであるのか、次節では原典に遡って検討していく。

3. 翻訳の原典について

先述のとおり、古代における「蛙と牛」の用例は、古い順に、ローマの詩人ホラティウスの作品中での言及（前1世紀）、ファエドルス集（1世紀）、バブリオス集（2世紀頃）に登場する。ところで、古代に由来する西洋古典語のイソップ集としては、ファエドルス集（ラテン語韻文）、バブリオス集（ギリシャ語韻文）、いわゆる *Augustana* 集を中心とする一群の散文ギリシャ語イソップ集（以後 *Augustana* 集）、の3種を挙げることができる¹³。しかし、「蛙と牛」は *Augustana* 集には含まれない¹⁴。規模としては *Augustana* 集がもっとも大きい、ファエドルス集とバブリオス集の双方が含み、*Augustana* 集が含まない話は、筆者の確認した限りで4話と非常に少ない¹⁵。さらに、そのなかで、古代の作家の作品中でも言及される話は「蛙と牛」のみであり、原典の現れ方という観点からも、比較検討するうえで興味深い対象ともいえる。

また、ギリシャ語の「蛙と牛」がバブリオス集由来という点も重要である。バブリオス集について、ジェームズは“The recent happy discovery of the long-lost Fables of Babrius”と記し¹⁶、タウンゼントは“In the year 1844,

13 *Augustana* 集は、アウクスブルク図書館に旧蔵され、現在はミュンヘンのバイエルン国立図書館所蔵の *Augustana Monacensis* 564 と呼ばれる 14 世紀頃の写本を代表とする諸写本から再構成されたギリシャ語散文イソップ集。その祖本は 2 世紀頃まで遡るものであると考えられる。

14 なお、中世までに普及したギリシャ語散文イソップ集としては、上記 *Augustana* 集の他、主要写本をもとに *Vindobonensis* と呼ばれる系統（祖本は 6～7 世紀頃）と、最初の印刷本にちなんで *Accursiana* と呼ばれる系統（祖本は 8～9 世紀頃）などが認められる（Hausrath (1957), pp. V-XVI）。「蛙と牛」はいずれの系統にも含まれない。

15 Phaed. 1.5 = Bab. 67, Phaed. 1.6 = Bab. 24, Phaed. 1.22 = Bab. 27, Phaed. 1.24 = Bab. 28、の 4 話。（Phaed. = ファエドルス集、Bab. = バブリオス集）

however, new and unexpected light was thrown upon this subject”と述べるが¹⁷、バブリオス集の主要写本（アトス写本）は1842年に「発見」された¹⁸。すなわち、それらの話が翻訳の参照元として利用可能になったのは、ジェームズやタウンゼントからみて、つい最近のことであった。（タウンゼントが記述する1844年は、発見された写本をもとに最初の校訂本が刊行された年である。）

ただし、「蛙と牛」については、1809年刊行のフリア本にも含まれている¹⁹。これは、フリア本がバブリオス集由来の話を一部含む写本も扱ったためであり²⁰、確認できる限りでは、その写本に関する最初の刊行本はフリア本であって、したがって、フリア本がバブリオス版「蛙と牛」を印刷刊行した最初の事例であった。一般的な参照可能性という点では、バブリオスの写本発見以前から（といっても、それでも19世紀に入った後に）すでに世に出ていることになるが、バブリオス集との関連性はアトス写本発見によって跡付けられたことにも留意しておきたい。

タウンゼントと異なり、ジェームズは具体的な参考文献を挙げていないものの、バブリオス集についてのみ、ルイス Lewis, G. C. の名に言及している²¹。ルイスは、タウンゼントが参考文献に挙げる、1846年刊行のバブリオス集校訂本の編者であり、ジェームズがルイスの校訂本を参照したことは間違いないと考えられる。（その点では、1848年刊行のジェームズ本は、直近の古典研究の成果に即応するものであったといえる。）

さて、以下では、古代の「蛙と牛」3種を検討する。原典テキストについ

16 James (1848), p. xvii.

17 Townsend (1867), p. xix. なお、“this subject”はバブリオス関係の話題を指す。

18 フランス公教育省から稀覯本収集の依頼を受けていたマケドニア人のメナス Menas, M. が、1842年にアトス山のラブラ修道院図書館で発見した写本。現在、Add MS 22087として大英図書館に収蔵されている。

19 タウンゼントの挙げるフリア本は1810年刊行のものである。フリア本は1809年にフィレンツェでラテン語対訳付き2巻本として刊行され、翌年1810年にはライブツィヒでギリシャ語部分のみの1巻本として再刊された。なお、フリア本の「蛙と牛」は378番。ハルム本でもバブリオス版「蛙と牛」が84番に収録されている。

20 Luzzatto & La Penna (1986), p. XXVII, Rutherford (1883), p. lxiii など。フリア本は、Codex Vaticanus Graecus 777としてヴァチカン図書館に収蔵される14、5世紀頃の写本に含まれる一群の話を、「ΕΚ ΤΗΣ ΒΙΒΛΙΟΥ ΘΗΚΗΣ ΒΑΤΙΚΑΝΗΣ」の見出しのもとに収録している。なお、Furia (1810), p. XLでは“nunquam editam Fabularum seriem Bibliothecae Vaticanae Codd.”と述べられ、それらが出版されたことのないものとされる。

21 James (1848), p. xvii.

ては、原則として翻訳当時のテキストを利用する。バブリオス集については両者が参照したであろう 1846 年刊行のルイス版テキスト、ファエドルス集についてはタウンゼントが挙げる 1822 年刊本、ホラティウスについては、選択が難しいものの、ここでは時期を合わせてファエドルス集と同シリーズ (Delphin Classics) の 1825 年刊本を利用しておく²²。

ホラティウス版：『諷刺詩』 *Saturae* 2.3.314-320

Absentis ranae pullis vituli pede pressis,
Unus ubi effugit, matri denarrat, ut ingens
Belua cognatos eliserit. Illa rogare,
Quantane? num tantum, sufflans se, magna fuisset?
Major dimidio. Nam tanto? Cum magis atque
Se magis inflaret; Non, si te ruperis, inquit,
Par eris.

母蛙が不在のとき、その子供たちを牛の足が押しつぶした。一匹の子蛙が逃れて、大きな獣が兄弟たちを潰した、と母蛙に伝えた。母蛙は「どれくらいの大きさだった? これくらい」と、身体を膨らませながら、「大きかったかい?」と尋ねた。「倍以上の大きさだった」(と子蛙は答えた。)
「これくらいかい?」と、母蛙がさらにどんどん身体を膨らませながら尋ねたとき、子蛙は「たとえ破裂しても、同じ大きさにはならないだろう」と言った。

ファエドルス版：第1巻第24話

RANA RUPTA ET BOS.
Inops, potentem dum vult imitari, perit.
In prato quondam Rana conspexit Bovem,
Et, tacta invidia tantae magnitudinis,
Rugosam inflavit pellem: tum natos suos
Interrogavit, an Bove esset latior.
Illi negarunt. Rursus intendit cutem
Majore nisu; et simili quaesivit modo,

22 それぞれのテキストは、ホラティウス版は Zeune (1825), p. 990、ファエドルス版は Schwabe (1822), pp. 90-91、バブリオス版は Lewis (1846), p. 33 より。現在よく用いられるテキストとは、字句やパンクチュエーションの異なる部分もある点に注意。

Quis major esset. Illi dixerunt, Bovem.

Novissime indignata, dum vult validius

Inflare sese, rupto jacuit corpore.

「破裂した蛙と牛」

力なき者は、力ある者を真似ようと望む間に、滅びる。

あるとき、牧草地で蛙が牛を目にし、牛の大きさへの嫉妬に駆られて、皺だらけの皮を膨らませた。そして、自身の子供たちに、自分が牛よりも恰幅がよいか尋ねた。子供たちは否定した。ふたたび蛙は、さらに大きな力を込めて皮を広げて、さきほど同様に、どちらが大きいかなを尋ねた。子供たちは牛と答えた。ついには、腹を立てた蛙は、より力強く自身を膨らませようとしている間に、身体が破裂して死んでしまった。

バブリオス版：第28話

ΒΟΥΣ ΚΑΙ ΦΡΥΝΟΣ.

Γέννημα φρόνου συνεπάτησε βοῦς πίνων.

ἐλθοῦσα δ' αὐτόσ' (οὐ παρῆν γάρ) ἡ μήτηρ

παρὰ τῶν ἀδελφῶν ποῦ ποτ' ἦν ἐπεζήτει.

“τέθνηκε, μῆτερ· ἄρτι γὰρ πρὸ τῆς ὥρης

ἦλθεν ἀχιστον τετράπουν, ὅφ' οὗ κείται

χηλῇ μαλαχθεῖς.” ἡ δὲ φρῦνος ἡρώτα,

φυσῶσ' ἐαυτήν, εἰ τοιοῦτον ἦν ὄγκῳ

τὸ ζῶον. οἱ δὲ μητρί, “παῦε, μὴ πρίου.

θᾶσσον σεαυτήν,” εἶπον, “ἐκ μέσου ῥήξεις,

ἢ τὴν ἐκείνου ποιότητα μιμήση.”

「牛と蛙」

牛が水を飲んでいるとき、ガマガエルの子を踏みつけた。その子の母親が戻って来ると（というの、母親はそこにいなかったため）、子供たちに「あの子はいたいどこ」と尋ねた。「死んでしまったよ、お母さん。たった今、一時間も経たないくらいに、どっしりした四つ足の獣が来て、そいつの蹄の下敷きになって踏みつぶされたんだ。」と子供たちは答えた。母ガマガエルは、自分の身体を膨らませながら、「その生き物はこれくらいの大きさだったかい」と尋ねた。子供たちは母親に答えて言った。「もうやめて、ふくらまさないで。あいつと同じくらいの大きさになるより先に、お母さんが体の真ん中から裂けちゃうよ」

以上 3 者を比較すると、すでに古代から作家ごとに内容は多様であったことがわかるが、なかでもファエドルス版の相違が目立つ。ファエドルス版では、牛が子蛙を殺す展開はなく、牛の大きさを確認するために身体を膨らませるわけではない。目の当たりにした牛の大きさに対する嫉妬が、蛙が身体を膨らませる動機となっている。また、子供に大きさを尋ねる点は共通するが、ファエドルス版は、さいごに蛙を破裂させ殺してしまう。冒頭で示される文言のとおり、まさに「滅びる」結末となる。（この点はむしろ、ファエドルスがそれに合わせて話を構成した可能性も考えられる。）

一方、ホラティウス版とバブリオス版は類似している。時期的な関係からすると、バブリオス版はホラティウス版を受けてのもの、とみて差し支えないだろう。なお、ホラティウスは、イソップと関連付けてこの話を引用しているわけではない。ホラティウス以前の用例はなく、ホラティウスが既存の話を用いたのか、彼が文脈に合わせて作り出したものか（話が持ち出されるのは、貧乏人が金持ちの真似をすることを批判する文脈である）、明確なことは不明である。また、バブリオス版については、写本では話の後に、「劣った者たちにとって、優れた者たちと張り合うことは危険である（ὅτι ἐπικίνδυνον τοῖς ἐλάττωσι παρατείνεσθαι τοῖς μείζουσιν）」という文言が散文で附されている²³。フリア本では印刷されているものの、ルイス本では、バブリオス本来のものではないとみなされて、削除され記載されない。

3 者の異同をまとめると、以下のとおりである。

	ホラティウス版	ファエドルス版	バブリオス版
① 牛の様子	・ 記述なし	・ 草地にいる	・ 水を飲んでいる
② 踏まれた子蛙	・ 一匹を除いてすべて	・ なし （筋書が異なる）	・ 一匹のみ
③ 母蛙への報告	・ 現場に母蛙は不在 ・ 子蛙から母蛙へ語る ・ 大きな獣	・ なし （筋書が異なる）	・ 現場に母蛙は不在 ・ 母蛙が子蛙に尋ねる ・ 四つ足の大きな獣

23 Furia (1810), p. 155. 文言はアトス写本、ヴァチカン写本ともに残る。本文に引用したテキストは、フリアが記載したヴァチカン写本のものである。アトス写本の文言には、ἐλάττωσι > ἐλάττωσι, μείζουσιν > μείζουσι という表記上の相違が見られる（Luzzatto&La Penna (1986), p. 30 参照）。

④ 母蛙が 身体を膨らま せる場面	<ul style="list-style-type: none"> ・計2回身体を膨らませる ・1回目に、牛の方が倍以上の大きさ、と子供が答える ・2回目に、破裂しても同じ大きさにならない、と子供が答える ・母蛙は破裂しない 	<ul style="list-style-type: none"> ・計3回身体を膨らませる ・牛への「嫉妬」が動機 ・2度子供たちに否定されたあと、「怒って」身体を膨らませる ・蛙は破裂して死んでしまう 	<ul style="list-style-type: none"> ・計1回身体を膨らませる ・同じ大きさになる前に真ん中から裂けてしまう、と子蛙が止める ・母蛙は破裂しない
⑤ 話前後の 教訓的文言	<ul style="list-style-type: none"> ・なし（ただし、貧乏人が金持ちの真似をすることを戒める文脈での使用） 	<ul style="list-style-type: none"> ・あり（「力のない者が力のある者を真似ようと望むと、滅んでしまう」） 	<ul style="list-style-type: none"> ・なし（ただし、写本には「劣った者が優れた者と張り合うのは危険」）

こうしてみると、ジェームズ版はこれら3者の内容が混合されており、タウンゼント版はバブリオスのものが基本となっていることが分かる。それぞれ、両者が序文で示す翻訳方針に沿ったものと評価できる。

ジェームズ版では、話の冒頭の展開（②③）はホラティウス版を基本に、子蛙が牛について四つ足の獣と説明する点はバブリオス版を利用、破裂する結末にいたる展開（④）はファエドルス版を基本に、「半分にもならない」という具体的な大きさへの言及はホラティウスの要素を利用している。冒頭の牛の様子（①）は、適合するものはない。ただ、水が飲めそうな草地ということで、ファエドルス版とバブリオス版の要素の混合にもみえる。また、教訓的文言の箇所は、ジェームズ独自の言い回しにみえる（とくに特別な内容が示されるわけではない）。

一方、タウンゼント版は、子蛙が踏まれる冒頭の場面など、描写に多少の増減はみられるものの、概ねバブリオス版に忠実な翻訳といってよい。ただし、ひとつだけバブリオス版と大きく異なる点は、「怒らないで」という子蛙の発言である。タウンゼントがファエドルス集やジェームズ本を知っていたことに疑いはなく、その点をふまえると、この発言の背景に、ファエドルス版に起因する「母蛙が怒って身体を膨らませて破裂してしまう」という一連の流れが垣間見える。すなわち、子蛙の発言は、母蛙が怒って破裂してしまうことを予め牽制するのである。そうしてみると、タウンゼントは、バブリオス版の文脈の中に、あえて「怒り」というファエドルス版特有の要素を婉曲的な形で差し込んだことになる。これは、話の作り方としては面白い仕

掛けであるが、翻訳としては原典テキストから乖離するものともいえる。

4. 19 世紀以前の英語版「蛙と牛」

ジェームズが序文で名前を挙げているように、19 世紀半ばの時点で、すでに英訳イソップ集は複数刊行されており、社会に普及していた。ジェームズやタウンゼントのものが世に出る前から、「英語で」イソップ集を読む環境は十分に出来上がっていたわけであり、幅広い読者層に、種々の「イソップの話」が広がっていたはずである。本稿で検討している「蛙と牛」についても同様の状況を想定できる。本節では、出版された英訳イソップ集のうち、最初の印刷本であるカクストン版（タウンゼントが序文で言及している）と、ジェームズが序文で名を挙げた 3 者（レストランジ、クロックソール、ドズリー）のものの、計 4 種を取り上げて、19 世紀以前の英語版の翻訳の在り方を簡単に確認しておきたい。

はじめて出版された英語版イソップ集は、1484 年刊行のカクストン Caxton, W. による翻訳本である。これは、1477 年頃に刊行されたシュタインハーヴェル Steinhöwel, H. のラテン語原文付きドイツ語翻訳イソップ集をもとに 1480 年頃にマシヨ Macho, J. が翻訳刊行したフランス語イソップ集を、カクストンが英語に翻訳したものである²⁴。英国における印刷本としても初期のものの一つといえる。また、レストランジ L'Estrange, R. 本は 1692 年、クロックソール Croxall, S. 本は 1722 年、ドズリー Dodsley, R. 本は 1761 年に初版が刊行されたもので、いずれも再刊多数であり、19 世紀まで広く読まれていたと考えられる。

以下、それぞれの原文を見ていこう²⁵。

カクストン版：（第2巻第20話）

24 小堀 (2001), p. 160、伊藤 (2009), pp. 3-4 など。シュタインハーヴェル本同様に、マシヨ本およびカクストン本も、1500 年頃までに何度も版を重ねて、当時広く流布したようである。

25 カクストン版は、1484 年刊行本の画像データを *Early English Books Online* で参照可能である。また、*University of Oxford Text Archive* (<http://ota.ox.ac.uk/tcp/>) にて、テキストの電子化も行われている (<http://tei.it.ox.ac.uk/tcp/Texts-HTML/free/A07/A07095.html>)。なお、1889 年にジェイコブス Jacobs, J. によって詳細な研究とともに翻刻版も刊行されているが、挿絵がわずかししか掲載されていない。他 3 者のテキストについては、レストランジ版は L'Estrange (1692), p. 34、クロックソール版は Croxall (1775), p. 20、ドズリー版は Dodsley (1761), p. 27 より。クロックソール版のみ初版が参照できず、1775 年刊行の第 10 版を利用している。

The xx fable maketh mencion of the Oxe / and of the frogge / whiche wold
haue compared her to hym

The poure ought not to compare hym self to hym which is ryche and myghty
/ As sayth this fable of a frogge / whiche was in a medowe / where she
aspyed and sawe on oxe whiche pastured / She wold make her self as gre
te and as myghty as the oxe / and by her grete pryde she beganne to swelle
ageynste the oxe / And demaunded of his chil dren yf she was not as grete
as the oxe and as myghty / And theyr children ansuerd and sayd / nay moder
/ For to boke and behold on the oxe / it semeth of yow to be nothyng /
And thenne the frogge beganne more to swelle / ¶ And when the oxe sawe
her pryde / he thradde and thrested her with his fo te / and brake her bely
/ Therefore hit is not good to the poure to compare hym self to the ryche /
wherfore men sayn comynly / Swelle not thy self / to thende that thou breste
not

蛙が牛を目にしてその大きさを真似しようとする点や蛙が破裂する点は
ファエドルス版と同様である。しかし、カクストン版では、後半の展開が大
きく異なる。蛙が自滅するのではなく、牛が蛙を踏みつけて破裂させるので
ある。ここでは牛が踏みつける原因として、*pryde*、すなわち蛙の思い上が
りが要点となっている。したがって、牛の行動は、蛙の思い上がりに対する
一種の戒めとして描かれる。

前述のとおり、カクストン版はマシヨー版の翻訳であるが、マシヨー版を
確認すると、さいごに牛が蛙を踏みつける展開となっている²⁶。マシヨー版
でも牛が蛙の思い上がり (*orgueil*) に反応する形であり、カクストン版はそ
れに従ったものといえる。一方、マシヨー版はシュタインヘーヴェル版の翻
訳であるが、シュタインヘーヴェルが利用したラテン語版 (ロムルス集と呼
ばれる中世の散文ラテン語イソップ集、ファエドルス集を散文化したものが
土台) およびそのドイツ語訳では、ファエドルス版同様に、蛙は自分で膨ら
んで破裂してしまう²⁷。牛が蛙を踏みつける展開は、マシヨーが翻訳する際
に改めたものとみられ、それがカクストン版にも引き継がれているのである。

また、思い上がりという行動評価への言及は、訳者による話の解釈が話の

26 マシヨー版は Ruelle (1982), p. 109 を参照。

27 シュタインヘーヴェル版については Österley (1873), p. 135 を参照。

内部に介入しているようにもみえる。実際、シュタインハーヴェルのラテン語版やドイツ語版では、「思い上がり」に該当する表現は話後の教訓的な説明部分で現れるだけであり（ラテン語 *te inflare*, ドイツ語 *hoffärtig*）、話中では語られない。マショー版、そして、それを引き継ぐカクストン版は、従来は外に置かれた解釈を話中に取り込んだうえで、さらに話の展開に手を加えて独自色を出した、当時としても新奇の話だったと考えられる。

レストランジ版：Fab. XXXV.

A frog and an Oxe.

As a Huge Over-grown Oxe was Grazing in a Meadow, an Old Envious Frog that stood Gaping at him hard by, call'd out to her Little Ones, to take Notice of the Bulk of That Monstrous Beast; and see, says she, if I don't make my self now the Bigger of the Two. So she Strain'd Once, and Twice, and went still swelling on and on, till in the Conclusion she Forc'd her self, and Burst.

The Moral.

Between Pride, Envy, and Ambition, men fancy Themselves to be Bigger than they are, and Other People to be Less: And This Tumour Swells it self at last 'till it makes All Fly.

レストランジ版は、ファエドルス版を簡略化したものといえる。子供の反応が省かれており、母蛙はどんどん身体を膨らませて破裂してしまう。蛙は「嫉妬深い」が、「怒って」限界以上に身体を膨らませるわけではない。ファエドルス版では子供の返答が怒るきっかけになっていたのに対して、レストランジ版ではそのきっかけが与えられないのである。

レストランジのイソップ集では、各話に短い教訓的文言（The Moral）と長めの省察（Reflexion）が付されている点が特徴である。カクストン版で現れた「思い上がり」については、レストランジの教訓的文言の中で言及されている。また、省察については、編者が話から導き出した独自の見解を、ともすれば話本文の倍以上の長尺で記すわけであるが、この体裁は、たとえば次に挙げるクロックソールに批判的に継承されている（クロックソールでは Application と称される）。

クロックソール版：FAB. XI.

The Proud Frog.

An Ox, grazing in a Meadow, chanced to set his Foot among a Parcel of young Frogs, and trod one of them to Death. The rest informed their Mother, when she came Home, what had happened; telling her, that the Beast which did it was the hugest Creature that they ever saw in their Lives. What, was it so big? says the old Frog, swelling and blowing up her speckled Belly to a great Degree. Oh! bigger by a vast deal, say they. And so big? says she, straining herself yet more. Indeed, Mamma, say they, if you were to burst yourself, you would never be so big. She strove yet again, and burst herself indeed.

クロックソール版の基本的な流れは、ホラティウス版とファエドルス版を混合したものである。草地で草を食む牛に子蛙が踏みつぶされ、生き残った子供たちが不在の母に報告する。その後、母蛙は子蛙に大きさを確認しながら身体を膨らませ、3度目に破裂してしまうのである。ただ、母蛙への子蛙の返答はホラティウス版に沿うものであり、母蛙は「怒って」身体を膨らませるわけではない。このように、子蛙が踏まれるところから母蛙の破裂につながる、古典に由来する二つの筋書きが混成される形は、筆者が確認できたなかでは、クロックソールが初めてである。

また、冒頭で子蛙が一匹だけ踏みつぶされる描写が、バブリオス版と共通である点は興味深い。とはいうものの、残念ながら、この点について、クロックソールがバブリオス版「蛙と牛」を参照しえたかどうか不明である。クロックソール本の刊行当時、バブリオス版「蛙と牛」を含むイソップ集は世に出ていなかったと考えられ、クロックソールがそれを知っていたとすると、フリアも参照した写本経由、あるいは未知の写本経由ということになる。しかし、子蛙が一匹だけ踏みつぶされる展開は、発想としては、ホラティウス版の子蛙の数を逆転させるだけで可能であるので、バブリオス版を知らずとも、クロックソールが独自に作り出すこともできたのではないかと、とも思われる。クロックソール本ではバブリオスの名に言及されておらず、そもそもクロックソールがバブリオスを知らなかった可能性もある。

ドズリー版：FABLE XXIII.

The Frog and the Ox.

A Frog, being wonderfully struck with the size and majesty of an Ox that was

grazing in the marshes, could not forbear endeavouring to expand herself to the same portly magnitude. After puffing and swelling for some time: "What think you, sister," said she, "will this do?" Far from it. "Will this?" By no means. "But this surely will." Nothing like it. In short, after many ridiculous efforts to the same fruitless purpose, the simple Frog burst her skin and miserably expired upon the spot.

ドズリー版は、ファエドルス版を基本にしているが、細部の描写については、独自の改変が行われているようにみえる。たとえば、大きさの確認を姉妹に行い、3度といわず何度も身体を膨らませたのちに皮が弾けて死んでしまう。また、ridiculous efforts や fruitless purpose といった形で、結果先取りの行動評価が話の中に差し込まれてもいる。ドズリーはこれを Ancient Fables のひとつとして提示するのであるが、実態としては、古代のイソップ集由来の話に基づいて改作したもの、ということになる²⁸。

以上、19 世紀以前の4種の「蛙と牛」を確認した。判断の難しいクロックソールの冒頭一節を除けば、いずれも基本的にファエドルス版（およびホラティウス版）をもとにしたものといえる。すべて、蛙は破裂して死んでしまうのである。これは、当時の参照可能な「蛙と牛」の原典が、それらラテン語版、とくにファエドルス版に由来するものだったことが要因と考えられる。とはいえ、話の細部は、編者ごとにそれぞれ独自に手を加えられている（カクストン版の場合は原本としたマシヨー版の影響が大きい）。

カクストン版では、最後に牛が蛙を踏みつけて破裂させてしまうという、他の英語版にない独自性が光る。しかし、後代にその筋書きが波及しているわけではない。一方、クロックソール版は、ホラティウス版とファエドルス版を混合させたものであり、この手法はジェームズにも引き継がれている。実際、クロックソール版の本文テキストのおよそ3分の1がジェームズ版と共通しており、両者の直接的関係を確認できる。ジェームズの場合は、原典に現れる要素に比較的忠実で、また、明確にバブリオス集も参照可能であったことが、クロックソールとの本文の相違に繋がっているものと考えられる。

また、ここで確認した 19 世紀以前の4種では、破裂にいたる蛙から「怒り」

28 ドズリー本は3巻からなり、第1巻 From the Ancients、第2巻 From the Moderns、第3巻 Newly Invented と副題が附されている。ドズリー版「蛙と牛」は第1巻に含まれる。

の要素が欠落している点が共通している²⁹。筋書きの改変によって蛙に怒る余地が与えられていないことも一因であろうが、母蛙が「怒って」身体を膨らませることはないのである。「嫉妬深さ」や「思い上がり」などへの言及はみられ、感情的な要素がすべて排されるわけではないことを考えると、この「怒り」の消失は、19世紀以前の英語版「蛙と牛」の特徴的な現象である。そうしてみると、英語版「蛙と牛」において、ジェームズが母蛙に「怒り」を取り戻させたことは、話の古典回帰を示すひとつの特徴といえるのであり、タウンゼントは子蛙にそうした「怒り」うる母蛙を牽制する発言を行わせたことになる。

5. 「牧草地で草を食む牛」

ところで、ここまでとりあげた英語版の本文テキストを比較すると、レストランジ版およびクロックソール版の冒頭部分で、*grazing in a meadow* 「(牛が) 牧草地で草を食む」という表現が現れる。あるいは、ドズリー版では *grazing in the marshes*、そしてジェームズ版では *grazing in a swampy meadow* と記され、類似の表現が用いられる。カクストン版のみ *frogge / whiche was in a medowe where she aspyed and sawe on oxen whiche pastured* と述べられるが、いずれにせよ、タウンゼント版を除く英語版「牛と蛙」では、牛は牧草地にいて、草を食んでいる。

もともと牛の様子については、ホラティウス版ではとくに触れられておらず（いきなり蛙の子を踏みつける）、ファエドルス版では「あるとき、牧草地で蛙が牛を目にした」(*In prato quondam Rana conspexit Bovem*)、バブリオス版では「牛は水を飲んでいる」(*βοῦς πίνων*) ものとされる。もちろん、ファエドルス版で牧草地にいと想定される牛の振る舞いとして、「草を食む」ことは容易に類推可能であるものの、これら「古典」版では、牛が「草を食む」姿は直接的には表現されていない。

この点について、草を食む牛の姿は、中世の散文ラテン語版に登場している。すなわち、シュタインヘーヴェル本のラテン語版において、「あるとき、牧草地で蛙が草を食む牛を目にした」(*In prato quedam rana vidit pascentem bovem*) と記され、「草を食む」(*pascentem*) ことが直接説明されるのである³⁰。

29 ただし、ファエドルス集は19世紀までにもしばしば印刷刊行されているため、19世紀以前に参照可能な範囲から「怒る」蛙が姿を消していたわけではない。

散文ラテン語版は、ファエドルス版とほぼ同じ文言に見えるが、牛 (bovem) に現在分詞 *pascentem* が添えられて、その様子が示される。これをフランス語訳したマシヨは「牧草地にいた蛙が、その場所で、草を食む牛を目にした」(*une grenouille qui estoit en ung pré ou elle apperceut ung beuf qui pessoyt*) と表現し³¹、カクストン版はこのフランス語をほぼそのまま英語に置き換えたものとなっている。

一方、この段階では、牧草地にいる蛙が草を食む牛を目にしたのであり、牧草地で草を食む牛を蛙が目にしたわけではない。ラテン語版を素直に読むと、「牧草地」は蛙の居場所を示す表現であり、状況として牛が牧草地にいることに疑いはなくとも、牛の居場所を直接示してはいない。それに対して、英語版の *grazing in a meadow* という表現は、草を食む牛が牧草地にいることを直接表すもので、構文に一種の転換が起きている。この場合、牛を目にする蛙は牧草地に存在しなくてもよい。

筆者の見る限り、英語版「蛙と牛」において、「牧草地で草を食む牛」はレストランジ版で初めて登場しており、おそらくレストランジの発想によるものである。これは、ファエドルス版に淵源を持ちつつも、中世・近世と時間を経て変容する中で生み出された、新しい表現であった。そして、その後の展開を鑑みると、*grazing* という語彙の選択も含めて、レストランジが示した表現の影響は大きく、「牧草地で草を食む牛」はジェームズまで受け継がれるような、英語版特有の描写となっているのである³²。

こうしてみると、本稿第3節にて、ジェームズ版冒頭の牛の描写が「古典」に適合するものではないと述べたが、ジェームズが独自に生み出したものではなく、レストランジに始まる、いわば英語版の伝統的表現に倣ったものであったことがわかる。一方、タウンゼント版の場合は、基本的にバブリオス版に忠実な翻訳であるため、牛は「水を飲む」のみであり、牧草地で草を食むことはないのである。とはいえ、その「水を飲む」牛の姿は、バブリオス集とともに「発見」されたものであって、19 世紀半ばの英語版においては、むしろ新しい描写となっていた。

30 Österley (1873), p. 135.

31 Ruelle (1982), p. 109.

32 ジェームズ版の表現については、直接的な影響はクロックソール版からと考えられ、レストランジ版の影響は間接的なものといえる。また、ジェームズが *swampy* という語彙を加えたのは、バブリオス版の「水を飲む」か、ドズリー版の *in the marshes* が関わっているようにも思われるが、あくまで推測の域を出るものでもない。

6. おわりに

「蛙と牛」の話に関するここまでの検討において、「翻訳」という体裁で英語版が構成される場合に、ひとつの原典がそのまま忠実に訳出されることが少ない、ということが見えてきた。これは、翻訳者の裁量で翻案・改作が行われていることも理由の一つと考えられるが、場合によって複数の原典を組み合わせて新たな英語版が構成され、全体として合致する原典が存在しなくなってしまうことも理由であろう。しかし、手法はどうあれ、「翻訳」といって翻訳者自身が少なからず手を加える点は共通である。何かしらの原典を英語で読めるようにすること以上に、それをもとに翻訳者が自身のバージョンを組み上げて読者に提示する形になっており、あるいはそれが「蛙と牛」を含む「イソップの話」という素材と向き合う際の伝統的な姿勢であったのではないかとと思われる。このことは、すでに古代から語りのたびに姿が変わり、時代を経るごとに内容も言語も多様な原典が増えていた、「イソップの話」独特の事情とも無関係ではないだろう。

ジェームズとタウンゼントは、それ以前の翻訳者たちと較べて、古典の原典志向という点で共通していた。この方針は、バブリオス集の「発見」など、当時の古典文献学の影響も考えられる。直近の研究成果であったバブリオス集の校訂本の存在は、否応なく両者の原典への意識を高めたはずである。実際、ジェームズの「蛙と牛」は、クロックソール版を下敷きとする原典混成型ではあったが、各要素について、一部英語版特有の表現を残しつつも、バブリオス版を含む古典の原典に即した内容が提示される点で新しいものであった。一方、タウンゼントの「蛙と牛」の場合は、ほぼバブリオス版に忠実な内容が英語で提示され、ギリシャ語の原典に即して翻訳された点で、それまでの英語版とは一線を画すものであった。しかし、そのようなタウンゼントもまた、「怒り」への間接的言及という形でひとつの原典の枠からはみ出してしまうあたりに、それまでの翻訳者たちとも共通する姿勢を示している。こうしてみると、両者の「翻訳」は、それまでの英文翻訳イソップ集の伝統と、古典の原典そのものへの新しい眼差しを背景とした、その時代ならではの作品となっていたといえるのである。

19世紀の半ばに英国で生み出され、同時代の日本に持ち込まれた英文イソップ集は、以上のような「翻訳」を含むものであった。一方、日本においては、それら自体が原典となり、その後の展開の起点となっていくのである。なお、現在行われるイソップ集の「翻訳」は、英語であれ日本語であれ、何

らかの古典ギリシャ語あるいはラテン語の原典に基づいて、その内容を訳出するものが主流であり、本稿で確認したような特徴はおよそ失われていることも指摘しておきたい³³。「翻訳」に関する基本的な発想の問題か、イソップ集がひとつの「古典」として認められる反面、それまで持っていた多様性や流動性が弱まってしまっているようにみえるのである。

さて、冒頭で触れた渡部温は「蛙と牛」を以下のように翻訳している³⁴。

第二六 かひる 蛙と牛の話

或日牛沢畔さへべに出て草はを食はみ。あちこちあるきけるとこがひるとき。蛙児むれの一群のになつてゐるのを思はず踏潰ふみつぶすと。其内の一疋あやうが危ばき場を逃はれ。蛙母はの許へ注進して。「ヤア阿嬢おつかさん。それはマア四足よつあしのある大な獣だが。それが同気みんなをふみつぶしました」といへば。蛙母驚はいて。「エ。大きかつたか。それはどんなに大かつた」といひながら。自分が満み気くれあがり。「こんなに大かつたか」ととへば。こかひる「それ処じやア御坐りません。もつと大う御坐りました。は、ヨシ。夫あははそんなに大かつたか」といひながら。ぐつと興張ふくれあがると。蛙児こがひるが仰あはむいて見て。「イヤア阿嬢おつかさん。中く半分にも及ませぬ」といふゆゑ。蛙母「其じやア此様かうか」と勢一せいぱい息張いきばると。腹はらが破やぶれて死しけるとぞ。己おのが及およびもせぬ巨大たいそうな事しやうを仕様じやうとすると。多くは自滅じめつするものじや

おおむねジェームズ版に忠実な翻訳に見えるが、母蛙は怒らない。すなわち、近代の日本で広く知られることになる「蛙と牛」の話の「母蛙」は、こうして再び「怒り」を忘れてしまうのである。

ちなみに、近代日本における「蛙と牛」の話は、渡部版が初出というわけではない。明治改元前の『遠近新聞』第15号（慶應4（1868年）年5月12日）の末尾に、「弥堅外史（＝鈴木唯一）訳」とされる話が掲載されている³⁵。題

33 たとえば日本語では中務（1999）、英語では Gibb（2002）など。両者とも、原典選択に相違はあるが、個々の話の原典と翻訳の関係はあくまで1対1対応である。とはいえ、現在の一般的な認識としては、そうした翻訳の方が普通であろうかと思われる。

34 本文は谷川（2001）、p.49 より。

名は付されず、イソップの名もなく、ただ「喩言（たとへ）」として紹介される2話のうちの1話である。

昔し蛙あり野にゐる牛を見て其体の巨大なるを羨み其身の皮を引延し我身は其牛よりも大なるやと外の蛙に問ひしに否と答へければまたも力をつくして皮を引延し孰か我より大なる者あらん哉と問ひけるに外の蛙は笑ひながら汝よりも牛は幾倍も大きしと答へけり其時件の蛙は怒りに堪えず今は一生掛命に皮を引延さんとせしに其身は裂けて死したりけり

訳者をふまえると、おそらく何らかの英語版からの翻訳と推測できるが、内容はファエドルス版に基づくものとなっている。とはいえ、「怒り」が出てくる一方で、ファエドルス版にはない独自の要素も含まれており、本稿で確認した範囲では原典が判然としない。それではいったい何を元にしたものか、ともすれば訳者による改変の可能性も含め、当時のイソップ受容の在り方として興味の尽きないところであるが、さらなる検討は今後の課題としたい³⁶。

【参考文献】

- Croxall, S. (1775) *Fables of Æsop and others*, 10th ed., London.
- Dodsley, R. (1761) *Select Fables of Esop and other fabulists. In three books*, Birmingham.
- Furia, F. del. (1810) *Fabulae Aesopicae quales ante Planudem ferebantur*, Leipzig.
- Gibbs, L. (2002) *Aesop's Fables*, Oxford.
- Halm, C. (1852) *Fabulae Aesopicae Collectae*, Leipzig.
- Hausrath, A. (1957) *Corpus fabularum Aesopicarum vol.1 fasc.1*, Leipzig.
- Jacobs, J. (1889) *The fables of Aesop*, 2 vols., London.
- James, T. (1848) *Aesop's fables; a new version chiefly from original sources*, London.
- L'Estrange, R. (1692) *Fables of Æsop and other eminent mythologists*, London.
- Lewis, G. C. (1846) *Babrii Fabulae Aesopeae*, London.

35 『遠近新聞』については、「早稲田大学図書館古典籍総合データベース」(<http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/>) 収録の画像データを参照して翻字した。

36 本研究は JSPS 科研費 18K12349・若手の助成を受けたものです。

Luzzatto, M. J. and La Penna, A. (1986) *Babrii Mythiambi Aesopei*, Leipzig.

Österley, H. (1873) *Steinhöwels Äsop*, Stuttgart.

Ruelle, P. (1982) *Recueil général des Isopets*, t.3, *L'Esop de Julien Macho*, Paris.

Rutherford, W. G. (1883) *Babrius*, London.

Schwabe, J. G. S. (1822) *Phaedri Augusti Liberti Fabulae Aesopiae*, Delphin Classics, London.

Townsend, G. F. (1867) *Three hundred Æsop's fables: Literally Translated from the Greek*, London.

Zeune, J. C. (1825) *Quinti Horatii Flacci Opera Omnia*, Delphin Classics, London.

伊藤博明 (2009) 「ボッジョ・ブラッチョリーニと『伊曾保物語』——シュタインヘーヴェル編「イソップ寓話集」のスペイン語版について」, 埼玉大学紀要 (教養学部), 第 45 号第 2 号, 1-15 頁.

河野与一 (編) (1955) 『イソップのお話』, 岩波少年文庫 020, 岩波書店.

小堀桂一郎 (2001) 『イソップ寓話 その伝承と変容』, 講談社学術文庫 1495, 講談社.

新熊清 (2008) 『翻訳文学のあゆみ——イソップからシェイクスピアまで』, 世界思想社.

谷川恵一 (解説) (2001) 『通俗伊蘇普保物語』, 東洋文庫 693, 平凡社.

中務哲郎 (1999) 『イソップ寓話集』, 岩波文庫赤 103-1, 岩波書店.

山本光雄 (1942) 『イソップ寓話集』, 岩波文庫赤 103-1, 岩波書店.